

# 畠田遺跡出土玉杖形木製品にかんする新知見と研究メモ

伊藤 雅文

## はじめに

1985年から87年にかけて発掘調査が行われた畠田遺跡から、玉杖の頭部に類似する形状の漆塗木製品が出土し、既に石川県立埋蔵文化財センターから報告書が上梓されている<sup>(1)</sup>。筆者は発掘調査を担当し報告書を編集したものの、土器群の編年的位置づけや大量の木製品などをはじめとして、弧文板、卜骨など県内初例の遺物も多く出土したので、細かな検討が行えなかったものがあった。今回検討する玉杖形木製品は、そのような遺物の一つである。それは、漆が全面に塗布されていたために製作技法がよくわからず、今まで心の中に引っかかっていたのである。

## 1 玉杖形木製品の報告

調査対象区域の中央を南から北に蛇行しながら貫流する川跡であるSD05中層から出土した。この河は、弥生時代後期後半ごろに流れを形成し、早い水流が堆積状況からうかがい知れる。弥生時代後期ごろには砂層の堆積が進んで穏やかな流れとなり、黒色系の粘質土が厚く見られ、白江期から古府クルビ期の土器が多量に出土している。埋没は高畠期で、川の西側ほど多くの土器を出土しているので、これら遺物を投棄した人々の生活の本拠は、川の西から南西側に展開していたものである。

報告書から玉杖形木製品関係の記述を再録する。「アカガシ材が使われ、全面にわたって黒漆が塗られている。記述の便宜上頭部、基部、脚部とする。頭部の全体的な形状は松林山型の琴柱形石製品を連想させる。頭部は二つに途中から分れその基



底に二つの突出部があり、二つの稜を持ちながら屈曲して基部に至る。基部は船状を呈し、底は丸く両端を上げている。脚は透かし彫りされ屈曲して杖本体部分に続くと思われる。頭部、基部の大きさの割に纖細な作りである。しかも、カシ材という非常に堅い樹木から作られている点に注意する必要がある。」

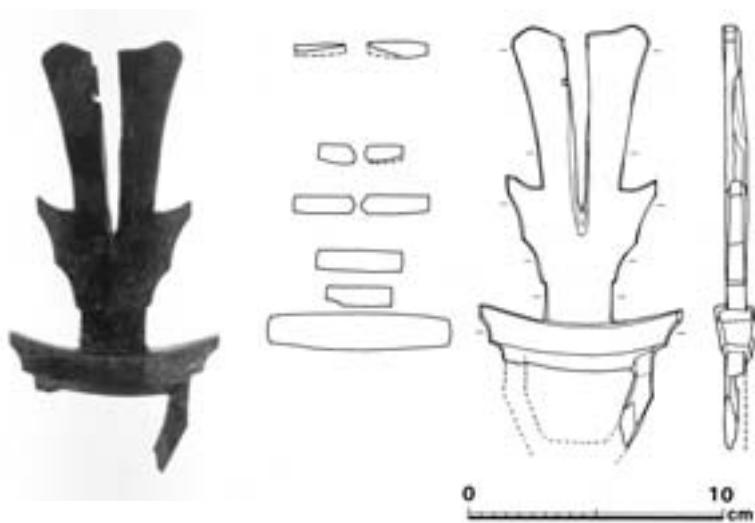
(133頁)、「…(前略)漆を塗り纖細な細工で作られた畠田例を、実用品としての(玉)杖に想定するには無理があろうか。さらに、カシ材から作られていることを考えると、木工技術の粋を集めて作られており、それらを作らしめる象徴的器物ではなかろうかと、考えたい。」(205頁)。法量は、現存長16.3cm、頭部厚0.7cm、基台幅7.9cm、同厚1.3cmである。

## 2 X線透過結果

X線透過による調査目的は、「頭部」とした鰐飾りが船状の「基部」との関係はどうなっているかを知ることにある。調査に用いた機器は当埋蔵文化財センターに備え付けられているX線照射装置である。照射条件は、電圧40kV、電流1mA、照射時間2分で、保存処理担当の中山主事がおこなった。

現在、玉杖形木製品はPEG含浸処理による保存処理が施されている。報告後直ぐに保存処理が行われなかつたので冷蔵庫の中で保管していたが、筆者の遺物の管理不行き届きで凍結してしまいかなり損傷を与えててしまった。それゆえ、「頭部」の鰐の一方が途中から欠損しているなど、報告時とX線照射時の形状が異なるのはこのためである。

照射結果により、一木で作られていることがわかった。基部には鰐飾りを差し込んだような柄穴やそこに差し込まれる鰐飾りの茎



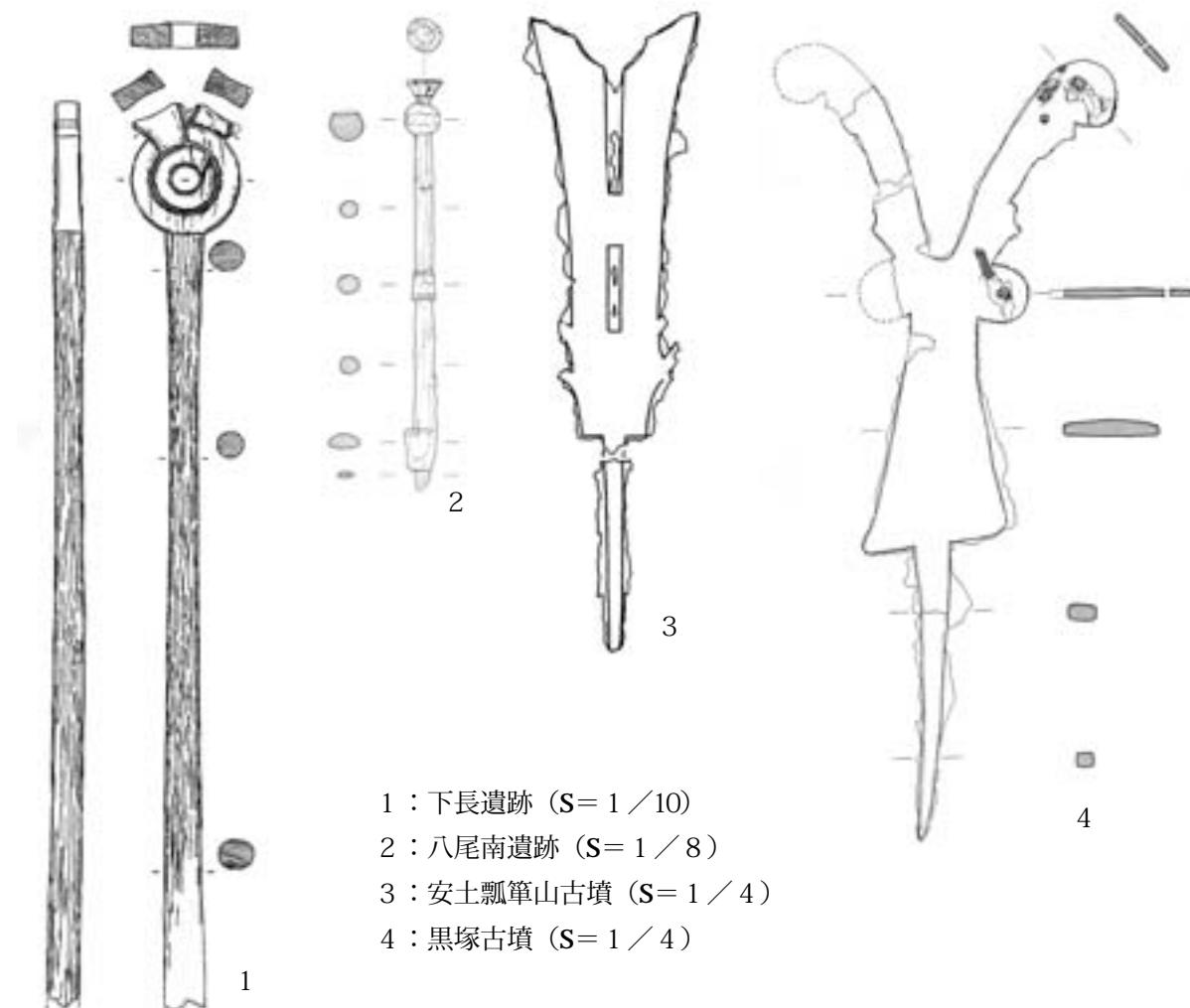
第2図 玉杖形木製品の写真と実測図 (S=1/3)



第3図 X線透過写真

(なかご)の陰影は写っていないのは、第3図の写真的とおりである。基部には厚みがあるので、やや黒っぽく見えるものの、基部上面がやや凹む位置にある鰐飾りの根元が見えることから、二つの部材を組み合わせたものならば何らかの痕跡が写るはずである。このような状況から、柄穴は無く一木を削りだして作られた器物であることが明らかとなった。

### 3 関連資料の検討



第4図 儀仗と関連遺物

厚さ7mmの頭部の鰐飾りをもち、9mmの厚みのある脚を屈曲させて下に伸びる纖細な造形を、木製鋤鍬などに使われる堅牢でねばりのあるカシ材を削りだして作られていることに驚嘆する。この器物が杖かどうかは断定できないが、16cmあまりという出土した部位の大きさから、いわゆる木製儀仗とされる滋賀県下長遺跡出土品<sup>(2)</sup>のような1mを超えるサイズは似合わない。また報告書刊行後に上原真人から儀仗の可能性は少ないと指摘を受け、「木器集成図録」でも「石川県畠田遺跡の『玉杖形木製品』は、(中略)下部を欠くので明言できないが、これも櫂<sup>たたり</sup>の可能性がある。ただし、櫂の台と考えられる平面方形、側面台形の木器は5~6世紀に集中しており、畠田遺跡出土の『玉杖形木製品』が弥生末~古墳時代初頭に属する以上、これを櫂と断言するのは保留すべきだろう」<sup>(3)</sup>との慎重な姿勢を示している。今回のX線調査の結果、畠田例に近い形状の器物など関連すると思われる資料もあ

り、玉杖の成立と展開をも視野に入れて検討する必要が出てきたと考える。

### ①杖としての可能性

木製儀仗と推定されている事例は決して多くはない。僅かだが、2・3の事例を確認する。

下長遺跡（滋賀県守山市古高町）<sup>(2)</sup>

古墳時代初頭（庄内期）の資料である。先端が欠損しているが、長さ100cmを超える。纖細な細工に適さないスギの半割材で作られている。上部に円形に回る弧文を作りだし、それが表裏2面で表現されているので、あたかも環状の頭部に二つの小さな突起があるように見える。頭部の大きさは、直径14.4cm、厚さ3.5cmで大形品であるために全体的に厚い作りである。

八尾南遺跡（大阪府八尾市八尾）<sup>(4)</sup>

古墳時代前期後半の資料である。報告書では完形のように表現されているが、「木器図録集成」では先端が欠損してさらに延びることとなっている。頭部に球形の飾りを持ち、途中一部の広がりがある。樹種は不明ながら芯持ち材であることから、少なくともヒノキやスギではない。

「木器図録集成」ではほかにも東大阪市鬼虎川遺跡のような弥生時代中期からの類例を載せているが、個々の形態にかなりの差があり、一般的に儀杖とする判断基準が不明確である。

### ②形態的な類似例

以下の2例は鉄製品である。いずれも茎部があり棒に刺して使われたものであろう。

安土瓢箪山古墳（滋賀県安土）<sup>(5)</sup>

前期後半の古墳で前方部埋葬施設から出土した。Y字形鉄製品と報告されているものである。先端が二股になったやや直線的に広がる方形である。先端の突起の内側が清野孝之が指摘するように<sup>(6)</sup>微妙なアールを描き、体部途中に透かしを設けることで、長い突起をイメージしたものである。このような点で、畝田例の形状要素に近い印象を受ける。

黒塚古墳（奈良県天理市柳本町黒塚）<sup>(7)</sup>

前期初頭の古墳である。Y字形鉄製品と報告されているもので、全長41.3cm、体部長25cm、厚さ0.4～0.8cmを測る。基部はいびつな台形で、その先端で二つに分かれる頂部がある。頂部は根元に円盤の突起を持ちそして大きく開いて丸い先端になる。円盤と先端には穴があけられ周囲に纖維が付着している。台形の基部から二股に伸びる突起という点で畝田例に通じるものがある。

### ③櫛としての可能性

櫛は、古墳時代中期以降に木製品が出土し、福岡県沖ノ島では平安時代の祭祀遺跡から形代としての金銅製品が出土している。櫛とは紡織具のひとつで、糸のもつれを防ぐために纖維の束をかける台である。櫛が古墳時代のどこまでさかのぼるか、はたまた弥生時代までさかのぼるか知らないが、少なくとも弥生から古墳時代前期にかけて一般的な器物ではない。そして沖ノ島の形代<sup>(8)</sup>や鳥取市塞ノ谷遺跡例<sup>(9)</sup>は畝田例との形の親近性を醸し出しているものの、畝田例を櫛として製作するのに何ゆえ硬いカシ材で作らねばならなかったのかという理由を探さねばならない。

## 4 まとめ

X線透過調査の結果、玉杖形木製品はカシを一本で削りだして作られていることを確認し、報告書

で述べた儀杖の可能性がより高まったと考える。この器物が作られた時代、弥生時代から古墳時代にかかる時期は、地域に王墓と呼べるような大規模な墳墓が出現する。ヤマトに纏向遺跡が営まれ、特徴ある古墳を作っていく。前方後円墳に代表される王墓が作られ地域を越えたオウガ誕生したとされている<sup>(10)</sup>。当然それにかかわる器物が生まれたであろうし、儀杖もまたこのような社会的要求の中で生まれたものであろう。畠田遺跡の玉杖形木製品の本質はこの点に求められると考えている。

そして、ここで検討しなかった松林山型の琴柱形石製品とのかかわりも重要であると考えている。亀井正道によってこれが玉杖との関連の中で生まれてきた器物であるとされる<sup>(11)</sup>。玉杖の出土例が限られ極めて特殊な遺物である。まずそれが考案されて作られて石製品として敷衍化されていく過程の中でさまざまな要素が交錯したに違いない。畠田遺跡出土の玉杖形木製品もそのような流れの中で理解されるべきものであり、北陸という玉生産との関係も最重要と考えている。ここでは細かく述べる紙幅はない。別に稿を書いているので、そちらに論考を譲ることにする。

#### 註

- 1 伊藤雅文・福島正実1991「畠田遺跡」石川県立埋蔵文化財センター
- 2 岩崎 茂2001「下長遺跡」Ⅷ 守市教育委員会
- 3 上原真人1993「木器集成図録 近畿原始編」奈良国立文化財研究所
- 4 八尾南遺跡調査会1981〔八尾南遺跡〕
- 5 梅原末治「安土瓢箪山古墳」『滋賀県史蹟調査報告』7冊 滋賀県教育委員会（1974年復刻 名著出版）
- 6 清野孝之1996「鱗飾りの変遷とその背景」『雪野山古墳』近江八幡市教育委員会
- 7 河上邦彦ほか1999『黒塚古墳』奈良県立橿原考古学研究所編 学生社
- 8 註3の欄の項目で詳しく述べられている。
- 9 小野山節1978「古墳時代の装身具と武器」『日本原始美術体系』5 講談社
- 10 寺沢薰2000「王権誕生」『日本の歴史』02 講談社 など
- 11 亀井正道1972「琴柱形石製品考」『東京国立博物館紀要』8号